



Japanese Association of Supportive Care in Cancer

日本がんサポーターケア学会 ニュースレター

News Letter **No.2**

2016.11

一般社団法人 日本がんサポーターケア学会

Tel: 092-406-4166 Fax: 092-406-8356

Email: jascc@jascc.jp URL: <http://www.jascc.jp>

目次

第1回学術集会を終えて

相羽恵介（第1回学術集会会長）	2
田村和夫（日本がんサポーターケア学会 理事長）	2
佐伯俊昭（第2回学術集会会長）	3

新理事からのあいさつ

江口研二（帝京大学医学部 難治疾患支援学講座）	4
佐藤 温（弘前大学大学院医学研究科 腫瘍内科学講座）	4
高橋孝郎（埼玉医科大学国際医療センター 緩和医療科）	5

行政からのメッセージ

清住雄希（厚生労働省健康局がん・疾病対策課）	5
------------------------	---

がんサポーターケアの取り組み

鈴木由香（東京慈恵会医科大学附属病院・外来化学療法室）	6
-----------------------------	---

新部会の開設：漢方部会

元雄良治（金沢医科大学）	8
--------------	---

JASCC Seminar 2016 in Adelaide 報告

相羽恵介（東京慈恵会医科大学内科学講座 腫瘍・血液内科）	8
------------------------------	---

第1回学術集件事務局より

宇和川 匡（東京慈恵会医科大学 腫瘍・血液内科）	9
--------------------------	---

お知らせ

JASCC Seminar 2016 in Adelaide 動画配信のご案内	10
---	----

編集後記	10
------	----

第 1 回学術集会を終えて

お礼

第 1 回学術集会 会長 相羽恵介（東京慈恵会医科大学内科学講座 腫瘍・血液内科）

謹啓 錦秋の候、会員の皆様におかれましては益々御健勝のこととお慶び申し上げます。
 この度は第 1 回日本がんサポーターケア学会学術集会にご参集いただきまして誠にありがとうございました。
 「副作用を制する者は、がん治療を制する」をメインテーマとして熱心な発表と活発な討議がなされました。
 お蔭をもちまして両日で約五百名のご参加をいただき、盛会の裡に会を終えることができましたこと、私ども
 一同衷心より感謝申し上げます。ご来駕を賜りました皆様には、何かと不行き届きの点があったかと存じますが、なにぶん不慣れで初回の開催でありました故、何卒ご容赦賜りますようお願い申し上げます。

資金不足により直前までスライドセッションを予定しておりましたが、学会方針として当初から十分な討議を
 対面（face to face）でとことん行うのが良いのではないかとの考えから、最終的にポスター発表とさせていただきます。朝早くからみなさまが参集され、熱気溢れ、ノートを懸命に取られる方が数多くおられたのには大変驚き、感銘を受けました。他の学会では最近あまり見かけなくなった風景ですので、いかに出席の方々が興味を持たれ、一生懸命かを感じとるに十分な迫力でした。行政の方からもご挨拶をいただきました。教育セッションは立ち見が出るほどでしたし、各セミナーも満席状態でした。シンポジウムもワークショップも司会の方々が早くより趣向を凝らし、構成を熟考され、内容も濃く、活気あふれるものでありました。こうした背景には、理事長はじめ理事・監事の方々を始めとして、各部会長・部員の方々のご指導の賜物と篤く御礼申し上げます。また開催準備に奔走し、ご苦勞を極めた学会本部の方々、そして教室のみなさまのご協力があった故の盛会と重ねて御礼申し上げます。

「副作用を制する者は、がん治療を制する」はがん治療の本質だと思います。日本がんサポーターケア学会が益々発展し、その成果が患者さんに還元されることを切に願いながら、また皆様の益々のご発展をお祈り申し上げます。御礼のご挨拶とさせていただきます。 謹白

第 1 回学術集会を終えて～本学会の全容が見えてきた

日本がんサポーターケア学会理事長 田村和夫（福岡大学医学部総合医学研究センター）

昨年 8 月の設立集会を経て、本年 9 月 3-4 日の 2 日間にわたり、日本がんサポーターケア学会、第 1 回学術集会を相羽会長のもと、多くの参加者を得て開催、無事終了することができました。東京慈恵会医科大学、腫瘍・血液内科の教室員・事務の方々、関係各位に深謝申し上げます。

参加された方はお気づきと思いますが、16 ある部会（現在 17 部会）の部会長、部会員が司会、演者、ファシリテーターとなり、ポスターディスカッション、教育セッション、シンポジウム、ワークショップといったすべてのプログラムが実施されました。

各部会は、医師、歯科医ばかりでなく、メディカルスタッフ、がんサバイバーなど多職種から構成されています。各部会は、それぞれのミッションに基づき調査・研究を実施し、エビデンスの創出やガイドラインの作成・発信、医療者・患者の教育に携わってまいります。すなわち、相羽会長の講演にもありましたように、本学会は、部会が核となって活動していく学術団体と言えます。

今回の学術集会を通して、我々のミッションならびに運営方針が言葉だけでなく、実際に行動すべき目標として部会、会員の方々に浸透したのではないかと思います。それは、理事をはじめとする学会運営の携わるものにとっても同様の感慨を持ったのではないかと思います。

一方で、第 1 回の学術集会を経験するなかで、多くの課題も明らかとなりました。課題の解決には時間と大きな労力を要するものが多々あります。しかし、患者さんのニーズに応えるためにも、課題を速やかに克服できるように本学会を発展させてまいりたいと思っております。ただ、産声を上げたばかりの学会ですので、みなさまのご指導なしには健やかな成長は困難です。引き続き暖かい目で見守っていただき、さらなるご支援をよろしくお願い申し上げます。

第2回学術集会 会長 佐伯俊昭（埼玉医科大学国際医療センター 乳腺腫瘍科）

第1回学術集会の盛況ぶりは、予想をはるかに超えた集会であったと思います。偏に学術集会会長の相羽先生と教室のみなさまのご尽力と感激いたしました。また、はじめての学術集会を開催するに際し、学会本部、学術集会事務局、さらに運営の支援をいただいたインタープランの皆様へ感謝いたします。勿論、主役である講演者の皆様、特に部会の皆様の活発な活躍が随所に垣間見られ、心強く思いました。何とか、日本のがん医療に支持療法を根付かせ、国民病となった「がん」撲滅の為に、行政、学術団体、医師、薬剤師、看護師、ソーシャルワーカーが立ち上がる良い機会が訪れたと感服致しました。また、第二回日本がんサポーターケア学会学術集会を担当することとなり、学術集会会長としての責任を改めて痛感しております。会期は平成29年10月27日（金）～28日（土）の2日間とし、埼玉県さいたま市大宮区のソニックホールと隣接するソニックシティを用意いたしました。「がん患者の心と体を支える力を養う」をテーマとして、議論を盛り上げ、その成果を日本の社会に対してメッセージとして出していきたいと思っております。プログラムは、シンポジウム・ワークショップをメインに教育企画委員会に企画をお願いしております。また、第一回と同様に部会を中心としたテーマごとの集いを企画させていただきました。今回は、一般演題は、ポスター発表、またはポスターディスカッション形式を採用し、部会に演題の採否から関連演題の発表形式の企画をお願いする予定です。また、関越がんサポーターケア研究会との共催も企画いたします。その他、MASCCのメンバーを中心とした海外演者による招聘講演、さらに、Advance Care Planningを2日目の午後に開催予定です。学会終了後には、鉄道博物館、日本盆栽美術館などの近隣の観光スポットもありますので、多くの方々のご参加をお待ちしております。



新理事からのあいさつ

がんのサポーターケアにおける本学会の役割を考える

江口研二（帝京大学医学部 難治疾患支援学講座）

2回の学術集会を経た本学会もすでに約 800 名の会員数となり、急速にその規模を大きくしています。本学会の目的が、がん医療におけるニーズに合致していることの証であろうと思います。本学会の特徴は、キーワードでいうと、「迅速性」と「リーダーシップ」です。具体的には、理事長の強力なリーダーシップのもと、各領域部会を設置し、これらの部会が学会活動全体を担うという目的指向型の体制です。旧来の大きな国内の医学関連学会団体にしばしば見られるような、ともすれば秩序、建前、手順、しがらみなどのコンフリクトはなく、担当分野の専門家、活動家によって構成される各部会が、分野内の課題を抽出して、年間の活動目標を定め活動を進めるという若い学会です。

このような部会主導型活動の参考となる団体は MASCC ですが、すでに本学会は MASCC, ESMO と深いつながりを形成しつつあります。

今後の展開を考えますと、各部会の使命として2つの柱、すなわちガイドラインの作成・迅速な改訂などを通しての教育啓発活動、そして、もう一つは、より有用性の高い新たなサポーターケアの方策に関する開発・実証的研究であると思います。AMED 等の課題についても、当面これらの領域の研究を支援する動きは強くなっています。部会の使命として精度の高い臨床研究を進め、ケアの真の有用性を検証する作業も重要な活動です。本学会が、迅速性、リーダーシップを活用させて、国内外にひろく情報発信していくことに、微力ながら少しでも加わらせていただければ幸いにおもいます。

顧みると、娘さんが日本企業におられて日本びいきの Schimpff 教授にお会いしたのは 1987 年ボルチモアで開催された ISCC でした。翌年ブラッセルの集会では Klastersky 教授邸で大きな会食のあったことなどが思い出されます。昨年からの JASCC の活動を目の当たりにして、当時を振り返ると隔世の感がありますが、この 30 年間の社会の変革は著しく、医療の担い手としての我々もより新たな取り組みを行わねばならないと考えます。

佐藤 温（弘前大学大学院医学研究科 腫瘍内科学講座）

昨年 8 月 30 日付けで日本がんサポーターケア学会理事を拝命いたしました。これまで消化器領域を中心としたがん薬物療法を専門とした臨床及び開発に携わってまいりました。振り返ってみますと、自身が医師になった頃は、まだセロトニン受容体拮抗薬もなく、シスプラチン投与時にはメトクロプラミド(プリンペラン®)を大量に投与して対応しておりました。もちろん効果は薄く、急性期嘔吐はかなりひどいものであり、患者さんは洗面器を抱えて点滴を受けていることもありました。さらには、制吐剤の副作用でアカシジアを発症した患者さんまでも経験することになりました。以後、セロトニン受容体拮抗薬や G-CSF 薬の承認申請のための治験に携わりながら科学進歩のすばらしさを肌で感じております。支持療法の研究開発/進歩はがん治療を受ける患者にとって切なる願いです。本学会の組織が充実することがその速度を加速してくれることと信じております。

私の担当する学術企画・教育委員会は、がんに関わる医療・介護者ばかりでなくがん経験者及び家族らに対し、有効且つ適切な支持療法を広く普及させることを目的に、がん治療に伴う有害事象およびがんに伴う心身の異常やつらさに対する包括的支持療法について、学術的ならびに教育的プログラムを企画する役割を担う部署です。調査・研究委員会の協力を得て、本学会年次学術集会、教育セミナー等の学術企画、および教育計画を通して、支持療法の普及、新しい情報の発信に努めてまいります。目的を見失うことなく、邁進していきたい所存です。そのためには、学会員みなさまのご協力なしには成し遂げられません。何卒ご支援のほどよろしくお願いいたします。

高橋孝郎 (埼玉医大国際医療センター 緩和医療科)

田村理事長、佐伯副理事長から、新しい学会をたちあげたので、理事として参加するようお願いをうけ、断る理由もなく受けさせていただきましたが、当初は何をする学会だろうかと思っていました。“がんサポーターケア”??。ひらがなとカタカナが混じった変な名前、「サポーターケア」キーボードで打ちにくいなあ、抗がん剤の副作用対策なら臨床腫瘍学会もやってるよな などなど疑問。しかし、田村理事長から学会のミッション・ビジョン(ニュースレターNo.1)をおききして、これは私のやりたい事、知りたい事と一致することがわかりました。厚生労働省が推進する“がん診断時からの緩和ケア”や、ASCO が提言する oncology と palliative care の統合(integrated)とかは、どのように取り組んだらいいのかよくわからないけどやるべきことと思っていました。緩和医療は終末期医療に重心があり、がん治療中のことについてはあまり関わってきませんでした。多くの oncologist は、“がんの治療はやりつくしました。あとは緩和の先生にみてもらいましょう”という緩和ケアのイメージです。患者さんも、緩和ケアチームですと自己紹介すると、そんな人たちにかかわってほしくありませんと介入を断られた事は一度や二度ではありません。緩和ケア=終末期医療 の図式は、払拭しがたい。そこで、新しい言葉・新しいイメージ、すなわち、がんサポーターケア(支持医療)=早期からの緩和ケア、palliative oncology のなかで、evidence を作り上げ発信していく方がはるかに有用と考えられます。この分野で、はっきりとした evidence がありガイドラインもあるのは、FN と CINV だけです。あとはみんな闇のなかにあって、専門的な研究も僅少です。しかし、がん治療を受けている(受けた)患者が必要としていることは、本学会で発信しようとしている包括的支持医療そのものです。2016/9/3-4 に第一回学術総会が相羽会長のもとにひらかれました。ポスター発表ではこの分野のすそ野の広さを反映していろいろな角度からの検討がなされ、熱気ある討論がくりひろげられました。本学会の発展が期待できると確信いたしました。理事として、本学会から研究成果が次々と発信され、がん患者さんが少しでも苦痛なく治療中治療後すごすことができるよう、微力ながら尽くしたいと思えます。

また倫理・利益相反委員会を担当しています。会員の皆様には、利益相反の開示などご負担をおかけしておりますが、正確な情報を発信するには必要なことでありますので、よろしくご協力のほどお願いいたします。

行政からのメッセージ

清住雄希 (厚生労働省健康局 がん・疾病対策課 課長補佐)

がんは、日本で昭和 56 年より死因の第 1 位であり、平成 26 年には年間約 37 万人が亡くなり、生涯のうちに約 2 人に 1 人ががんにかかるかと推計されています。我が国では、平成 24 年 6 月に策定した「がん対策推進基本計画」に基づき総合的かつ計画的にがん対策を推進しており、がん研究、緩和ケアの推進、相談支援体制の充実、就労支援等の施策を講じています。

このような施策によりがん対策の進捗は見られるものの、「がん対策推進基本計画中間評価報告書」(平成 27 年 6 月)では、基本計画の全体目標の 1 つである「がんの年齢調整死亡率(75 歳未満)の 20%減少」について達成が難しいと予測されました。こうした状況を踏まえ、平成 27 年 12 月、「がんの予防」「がんの治療・研究」「がんとの共生」を 3 つの柱とした「がん対策加速化プラン」を策定しました。がん対策加速化プランでは、基本計画に示されている分野のうち、特に①遅れているため「加速する」ことが必要な分野、②当該分野を「加速する」ことにより死亡率減少につながる分野について実行すべき具体的施策を示しています。その中で、「支持療法の開発・普及」を重要施策の 1 つとして取り扱っており、現状として、多くの患者ががんによる症状や治療に伴う副作用・合併症・後遺症に苦悩していること、海外に比べ研究の推進やガイドライン整備が遅れていること等が指摘されています。このような現状に対する実施すべき具体策として、がん治療に伴う副作用・合併症・後遺症に対する支持療法に関する研究や、支持療法に関するガイドライン作成に向けた研究の推進を掲げております。

日本がんサポーターケア学会におかれましては、まさにこうした課題に焦点を当てた活動を推進されており、厚生労働省としても、貴学会と協力し、科学的証明に基づいた支持療法を開発することとともに、患者の背景に応じた、その人の生活に沿った支持療法を普及するための施策を進めていきたいと考えております。最後に、田村理事長をはじめ、会員の皆様のご健勝とご活躍を心からお祈りいたします。

がんサポーターケアの取り組み

鈴木 由香 (がん化学療法看護認定看護師)

東京慈恵会医科大学附属病院・外来化学療法室 師長

当院は、平成 24 年 4 月 1 日に東京都中央区における『地域がん診療連携拠点病院』に指定され、がん医療の水準向上を図るとともに患者さんにとって、安全で適切ながん医療を、安心して受けられる環境づくりに病院をあげて取り組んでいます。

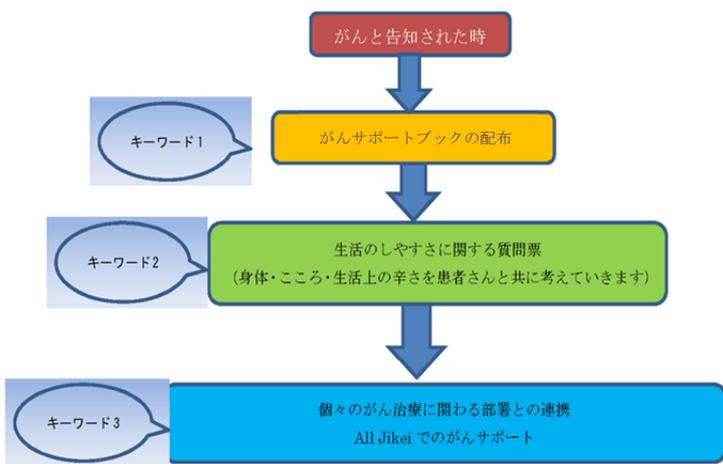
当院では、がんと診断された時からサポーターケアが受けられるよう、次のような取り組みを行っています。

1. がんと診断された時

がん告知を受けた時（外来・病棟共）、当院で作成した『がんサポートブック』をお配りしています。告知時には「頭が真っ白になってしまった」「何を言われたか覚えていない」など、大きな心の動揺が生じます。その時には読めなくても、少しずつ気持ちが整理されてきた時に、患者さんの手助けになるような情報をこのサポートブックにまとめています。同時に当院の「がん相談支援センター」の案内も行っています。

2. 治療が始まる前に

患者さんと共に「生活のしやすさに関する質問票」（図 1）を用いて、現在の身体・心・生活上の問題を整理します。ここで得られた情報は、医師・看護師で共有し、話し合いの中で必要と判断された場合や患者さんが希望されている時は、緩和ケア科、精神科、がん相談支援センター、ソーシャルワーカー、より専門的ながん専門看護師、がん化学療法認定看護師などと連携し、早い段階から患者さんのサポート体制を構築します。



【図：生活のしやすさに関する質問票】

3. 抗がん剤治療

1) 抗がん剤治療前

看護師・薬剤師による治療前に以下のようなオリエンテーションを実施しています。

治療内容に合わせ、使用する薬剤に特徴的な出現しやすい副作用とその予防方法や対策法を指導していきます。患者さんの生活の中に治療があることを常に念頭に置き、個々の生活の特徴にあわせた予防方法を共に考えていきます。抗がん剤治療は費用もかかりますので、高額療養費制度の説明も事前にいたします。

2) 治療中

治療当日は診察前問診の中で、副作用状況や精神面を含めた体調確認を行います。生じている副作用に対しては、現状あるいは新たなサポーターケアでの軽減が可能かどうかを判断し、より良いケア方法を提示します。

3) 治療後

外来通院治療で次の診察までに体調変化が生じた際は、我慢せずに気軽に電話連絡してもらえよう（病院へ連絡することに対する敷居がひくくなるよう）日頃から説明しています。

看護師が状況を詳しく聞き、電話対応で済むものに関しては、適切な対処法をアドバイスしています。

「具体例として」

☆すい臓がん治療における支持療法の場合

膵臓癌に特徴的な症状と今後予想される症状、さらには治療（薬物療法）により起こりうる副作用に対する支持療法を列記します。

1) 痛み

前述したように治療開始前には『生活のしやすさに関する質問票』を用い患者さんが抱えている問題を整理します。痛みが生じている場合は、治療前であっても緩和ケア科等と連携し、積極的に痛みをコントロールしていきます。痛みがある状態では、やすらぎは得られず治療もうまくいきません。

2) 不眠や心のつらさ

生活に支障をきたすような不眠や心の安定が得られていない場合は、専門医に相談したりカウンセリングをおこなうことで、辛さが和らぐように努めていきます。

3) 食欲不振

疾患による症状や抗がん剤治療による食欲不振に対しては、栄養士が介入し栄養相談を行います。必要なエネルギー量や食べやすいものの工夫などをアドバイスします。

4) 抗がん剤治療による副作用

(1) 下痢・腹痛

すい臓がん治療で用いられることのあるイリノテカン[®]では、しばしば下痢や腹痛を起こす場合があります。コリン作動性の下痢であれば抗コリン薬を用いて、その原因メカニズムにあった治療法で対応していきます。

(2) 手足症候群

すい臓がん治療で用いられることのあるティーエスワン[®]では使用を継続していく中で、掌や指先などに亀裂が生じたり、発赤や痛みが出てくる場合があります。これは、予防的に保湿ケアを行っていくことが大切です。当院では、抗がん剤治療中の皮膚障害に対しては、治療開始早期、分子標的薬などを用いる場合は治療開始前から皮膚科と連携することで副作用の予防あるいは軽減を目指しています。

当院におけるがんサポーターケアのキーワードは、各科の枠を取り払った All Jikei でのがんサポート、がん告知と同時に始まる当院オリジナルの「がんサポートブック」を用いた患者支援、さらには治療開始前からの「生活のしやすさ質問票」での問題点の洗い出し、の3つです。

今後は未知の副作用をもつ新しい薬が次々と出てくることが予測されますが、これらのキーワードで、さらにより良い、患者さんのためになるサポーターケアができるよう努力して参ります。



新部会の開設：漢方部会

元雄良治（金沢医科大学腫瘍内科学）

2016年9月4日の総会で漢方部会が承認され、活動を開始しました（部会長：元雄良治、副部会長：上園保仁）。全人的医療に適した漢方医学は、がんサポータティブケアの多くの分野で応用可能で、医療経済的にも有用と考えられます。当部会は、医療用漢方製剤の有効性と安全性を科学的に検証し、本学会の各部会と連携しながら、がんサポータティブケア領域における漢方の適正使用に貢献することを目的とします。当部会の具体的な業務内容は、がんサポータティブケア領域における漢方製剤に関する臨床試験の支援、これまでの漢方のランダム化比較試験(RCT)のシステマティック・レビュー、診療ガイドライン作成グループへの漢方のエビデンス情報の提供、漢方製剤のRCTを集積している日本東洋医学会 EBM 委員会（委員長：元雄良治）との協力・連携、将来的な「がんサポータティブケア領域における漢方診療ガイドライン（仮称）」の作成、などです。厚生労働省がん対策推進協議会の「がん対策加速化プラン」で、「漢方薬を用いた支持療法に関する研究を進める」と記載（2015年12月）；AMED平成28年度「『統合医療』に係る医療の質向上・科学的根拠収集研究事業」：「統合医療情報発信サイトに関する客観的評価および統合医療に関するシステマティック・レビューの実施」（研究代表者：元雄良治）において、漢方製剤の有効性と安全性のシステマティック・レビュー開始（2016年4月）；日本東洋医学会・日本漢方生薬製剤協会の「国民の健康と医療を担う漢方の将来ビジョン研究会」が設立され、第1回会議「がん領域」で、「がん支持療法で漢方薬のエビデンス構築を加速すべき」と提言（2016年8月）など、当部会はまさに産学官が一体となった支援を頂いています。本学会の皆様には今後ともよろしくお願い申し上げます。

JASCC Seminar 2016 in Adelaide 報告

相羽恵介（東京慈恵会医科大学内科学講座 腫瘍・血液内科）

「JASCC Seminar 2016 in Adelaide」が今年の MASCC 年次総会の初日、6月23日の夕刻より Stamford Plaza Adelaide Hotel にて JASCC/小野薬品工業株式会社の共催にて開催された。セミナーのテーマとして「CINV とがん悪液質の最新情報」を掲げ、Session1 は「悪液質について－現状と課題－」と題して田村 JASCC 理事長の司会にて David Currow 教授（Flinders University/Palliative and Supportive services）が「がん悪液質の最新情報」について、また内藤立暁先生（静岡県立静岡がんセンター呼吸器内科医長）が悪液質の「機能予後をどう改善するか」を講演された。Session 2 は「CINV ガイドライン update」と題して慈恵医大相羽の司会にて Matti S. Aapro 教授（Institut Multidisciplinaire d'Oncologie/Clinique de Genolier、JASCC 顧問）が「MASCC/ESMO 制吐療法ガイドライン 2016 の概要について」、また佐伯俊昭教授（埼玉医科大学国際医療センター包括的がんセンター長）が「日本癌治療学会編 制吐薬適正使用ガイドライン 2015 の概要」について講演された。今次 MASCC 総会は 25 周年の記念大会でもあり、歴代の会長が登壇して MASCC の来し方と将来課題について会場も熱く一緒になって議論を進めた。総勢 1,000 名余りの参加者があり、オーストラリア、アメリカについて日本は 3 番目、100 名の出席者があった。「JASCC Seminar 2016 in Adelaide」でも実に 72 名の出席者を数え、それぞれのセッションで活発な議論を重ねた。がんサポータティブケアはがん研究領域での新規分野であるが、多分野・多種職の人材が一致協力して患者ケアに精励するという今日的な医療分野である。

セミナー後の懇親会でも、そこそこに職種を超えた談笑の輪が広がり、新たな分野に挑戦するお互いの意気込みと熱い活気が会場に満ちていた。そして 9 月の第 1 回 JASCC 学術集会での再会を約束して三々五々セミナー会場を後にした。

第1回学術集会事務局より

宇和川 匡 (東京慈恵会医科大学 腫瘍・血液内科)

2016年9月3日～4日の2日間にわたり、東京慈恵会医科大学内において日本がんサポーターケア学会学術集会を開催させていただきました。第1回目ということもあり（全く言い訳にはなりません）、学術集会開催にあたり皆様へは多大なご心配をおかけいたしましたこと、この場を借りてお詫び申し上げます。また学会事務局におかれましては多大なるサポートをいただきまして、心より御礼申し上げます。

われわれ事務局一同は、特に第1回学術集会ということでいろいろな面で不安で一杯でした。そんな折に田村理事長より「学術集会というのは開催直前まで様々な新たな問題が生じるので気が抜けないが、会が始まってしまえば一気に進んでいくものだ」というお言葉をいただいていたために、学会初日のポスター会場で多くの参加者と熱い討論を目にしたときは、一瞬で体が軽くなったのを今でも鮮明に記憶しています。

われわれは学術集会の準備を進めていくにあたり「日本がんサポーターケア学会」の特殊性に則した学術集会の開催、つまり支持療法の各論における目次となる各部会が中心となってそれぞれの専門分野を仕切る形で議論を進めていく形式と本学会のミッションのひとつである支持療法の教育という観点から、教育セッションの充実には首尾一貫してこだわりました。また諸先生方のサポートをいただきまして、今回の学術集会内での議論が難しい分野に関しては各共催セミナーでカバーすることができ、本学術集会全体を通してみると支持療法の大部分に関われるようにいたしました。

がんの支持療法は、がん診療においてこれからますます必要とされ、さらに科学的に研究されていく分野です。われわれは第一回学術集会で、種まきをいたしました。佐伯俊昭先生（埼玉医科大学国際医療センター 包括的がんセンター長）の主催される第2回学術集会以降で芽を出し、幹の太い樹に育て上げていただけることを願うとともに、われわれも今後開催される学術集会に微力ながら貢献させていただければと考えております。

皆様のご協力のおかげで、第1回学術集会を終えることができました。

誠にありがとうございました。心より御礼申し上げます。



お知らせ

JASCC Seminar 2016 in Adelaide 動画配信のお知らせ

MASCC/ISOO2016（2016年6月23日～25日にアデレード/豪州）に合わせて開催しました

「JASCC Seminar 2016 in Adelaide」のセミナー内容を動画配信いたします。（会員限定）

動画を視聴するにはID・パスワードが必要です。会員メーリングにてお知らせいたします。

ご不明な場合は、事務局までお問い合わせください。

JASCC サイト <http://www.jascc.jp/>



編集後記

ニュースレター第2号を発刊いたしました。今年は第一回日本がんサポーターシップケア学会学術集会が開催され、その開催状況はfacebookを通してすでに配信されておりますが、各方面から第一回学術集会に関するコメントをいただきました。また、行政の方や新たな理事からのおことばや新設された部会の意気込みも掲載いたしました。さらに各施設におけるがん治療における支持療法の工夫や取り組みについても掲載いたしました。今後は、がんサバイバーやその家族から本学会に期待することや各部会の活動を掲載予定です。また、会員の皆様からのメッセージがございましたら、事務局までお寄せください。ニュースレターVol.2に御寄稿いただきました各位に感謝申し上げます（事務局）